

家庭教育についての自己分析
 — 青年女子による自由記述資料から —

愛知女子短大 岡野雅子

〔目的〕近年、教育についての論議は国民的問題と言っても過言ではない。その流れの中で、いま改めて、乳幼児期の家庭教育の重要性について指摘されている。ところが、そこで行なわれている何が、その後の子どもの発達などの側面に対してどのような影響を及ぼしているのかについては、いまひとつ明らかにされていない感がある。本研究では、家庭教育のほぼ終了期を迎えた段階にあると位置づけることができ、しかも今後近い将来に自らが家庭教育の担い手にもなることが予測される青年期女子に焦点をあてて、彼女達の自己分析資料を基にして考察を試みる。

〔方法〕A女子短期大学家政科専攻学生155名とB保育専門学校学生211名の計366名（共に第2学年。年齢は19才及び20才が大部分を占める。）による「私の受けた家庭教育（主に乳幼児期及び児童期）」のレポート（エピソードと考察）を資料とした。

〔結果〕①各学生の書いたエピソード数は1～5で平均2弱である。そこに現われた発達時期は、幼児期・児童期・全体を通して、がほぼ均等々を占めている。②自己評価について、肯定的評価から否定的評価まで5段階に分けたところ、「3」と「4」が多く平均得点は3.26となり全体としては僅かに肯定的方向に傾く。③個々のエピソードは実に様々であるが、同類のテーマでも、自己評価は肯定的方向と否定的方向に分かれ、それはほとんどすべてのテーマに当てはまり、評価の方向性の変化は思春期頃を境とするようである。④概して否定的評価の場合のエピソードは具体的であり、肯定的評価の場合には漠然としていることが多い。⑤家政系学生と保育系学生の専攻による差異はほとんど見い出せない。